

現代日本語のアクセントの型の分布

——『電子ブック版 大辞林』を資料として——

栗 林 均

「研究紀要」第51号（1996）抜刷

平成8年3.15印刷，平成8年3.30発行

—— 日本大学文理学部人文科学研究所 ——

現代日本語のアクセントの型の分布^{*)}

—『電子ブック版 大辞林』を資料として—

栗 林 均

1. 共通語のアクセントの型

日本語のアクセントは「ピッチ・アクセント」とも呼ばれるように、声の高さの違いによって実現されている。語の中には高く発音される部分と、低く発音される部分があり、これは性別や年齢差、個人差を越えた「社会的なきまり」として確立している。

言うまでもなく、発話における声の高さは、男性と女性で異なり、年齢による違いや、個人差も少なくない。また同じ個人でも、改まった場合やうちとけた場合で声の高さが違ってくるように、場面や状況によっても様々な変化が認められる。しかしながら、アクセントを構成するのは、こうした状況によって変化する絶対的な音程ではなく、ひとつの発話の中における高と低の相対的な差異にほかならない。高い声の人は高い音域の中で、低い声の人は低い音域のなかでそれぞれ「高」と「低」を区別しており、それが互いに同じパターンとして認識される。それは、ちょうどひとつのメロディーが楽器の違いや音階の違いを越えて「同じ」メロディーとして知覚されるのに等しい。

音楽には多種多様な音程があるが、日本語のアクセントで区別されるのは「高」と「低」の2種類に限られる。これも現実には、同じ発話のなかで声の高い領域から低い領域に至るまで様々な高さの音が連続して現れるわけであるが、アクセントのパターンとしては「高」か「低」のいずれかで認識されるのであり、中間的な段階は存在しない。

* * *

語のなかで「高」および「低」といった声の高さをに単位は「拍（モーラ）」とよばれるが、これは「かな」と極めてよく符合している。つまり、表記上の単位である「かな」1文字は、ほとんどの場合、音声的な単位としての「拍」と合致している。唯一の例外は、小さいかなを書く場合（「ャ」「ュ」「ョ」がその典型）であるが¹⁾、この場合、小さいかなとそれに先行するかなの2文字（「キャ」「キュ」「キョ」等）が「拍」に相当する。これを除けば、撥音（「ン」）、促音（「ッ」）、長音（「ー」）もふくめて、「拍」は「かな」1文字と一致する。

*) この論文は平成7年度文部省科学研究費補助金の交付を受けて行った研究の成果の一部である。

そして、アクセントは、それぞれの拍を発音する際の声の高低によって実現されている。したがって、日本語のアクセントを論ずる際には、一見厳密に見える発音記号による表記よりも、むしろ「かな」による表記の方が目的に叶っているといえることができる。

要するに、単語は「かな」に相当する拍から構成されており、それぞれの拍は「高」あるいは「低」のいずれかの特徴を帯びている。単語の中のそれぞれの拍に割り当てられている「高」と「低」の配置がすなわち、その単語のアクセントにほかならない。

* * *

拍に割り当てられる「高」と「低」は、単語の中で無秩序に配置されているわけではなく、配列のしかたには一定のきまり(制約)が認められる。このきまりは、方言によって異なり、これによって方言ごとのアクセントの特徴がつけられることになる。たとえば共通語の3拍からなる語をみると、すべての語は「低高高」「高低低」「低高低」の3つのうちのいずれかに該当し、これ以外の「高高高」や「高低高」「低低高」といった型は現れることがない。

「低高高」の例 — ア[○]タ[●]マ[●], オ[○]ト[●]コ[●], キ[○]モ[●]ノ[●], テ[○]ガ[●]ミ[●], リ[○]ン[●]ゴ[●], etc.

「高低低」の例 — カ[○]ラ[●]ス[●], マ[○]ク[●]ラ[●], テ[○]レ[●]ビ[●], セ[○]ン[●]キ[●]ョ[●], ト[○]マ[●]ト[●], etc.

「低高低」の例 — ア[○]マ[●]ド[●], ム[○]ギ[●]チ[●]ャ[●], ヒ[○]ト[●]ツ[●], シ[○]ロ[●]イ[●], タ[○]バ[●]ル[●], etc.

単語におけるこうしたアクセントの型は、助詞や助動詞といった付属語のついた「文節」にもそのまま当てはまる。表1は、『大辞林』の「凡例」に示されている図を簡略化したものであるが²⁾、共通語においてそれぞれの拍数の語に1拍の助詞(「が」「の」「に」「を」等)がついた場合に、どのような「高」と「低」の配列が現れるかを示したものである。白丸は、1拍の助詞、黒丸と二重丸は単語の中の1拍を表す。このうち、二重丸は「高」の次に「低」

表1 日本語のアクセントの型(『大辞林』「凡例」より一部簡略化した)

	①	②	③	④	⑤	⑥	
一拍語	ナ名 	キ木 					
二拍語	ミズ水 	アキ秋 	ハナ花 				
三拍語	カイシャ会社 	デンキ電気 	オカシお菓子 	オトコ男 			
四拍語	ダイガク大学 	ブンガク文学 	ユキグニ雪国 	サイジキ歳時記 	オトオト弟 		
五拍語	チュウゴクゴ中国語 	シャアベットシャーベット 	フキュウリツ普及率 	ヤマノボリ山登り 	コガタバス小型バス 	モモノハナ桃の花 	
六拍語	ケンブツニン見物人 	ケンモホロロけんもほろろ 	オマワリサンお巡りさん 	キンコンシキ金婚式 	コクゴジテン国語辞典 	タンサンガス炭酸ガス 	ジュウイチガツ十一月

が現れる位置、つまり「高から低への移り目」を表したもので、しばしばアクセントの「滝」、あるいは「核」などと呼ばれる。

表1には、1拍語から6拍語までに現れるアクセントの型が余すところ無く列挙されているが、アクセントの型はさらに縦の欄で類別されている。それは、アクセントの「滝」の有無、および「滝」の現れる位置にもとづく分類である。共通語においては、原則として「滝」は1語（および1文節）の中で、存在しないか（ゼロ）または1つだけ存在するかのいずれかである。表1では、「滝」が存在しない場合を数字の「0」（ゼロ）で表し、「滝」が存在する場合にはそれが語頭から数えて何拍目に存在するかが数字の「1～6」で示されている。

0 → 「滝」なし。

1 → 1拍目（から2拍目への移り目）に「滝」がある。

2 → 2拍目に「滝」がある。

3 → 3拍目に「滝」がある。

…………… 以下同様

このようにアクセントの型を数字で表すやり方は、計算機を利用してアクセントの統計・計量分析を行う上で極めて有利である。数字を含む文字列の入力、検索、編集、計算、統計は計算機のもっとも得意とする作業だからである。本稿は、『大辞林』の見出し語のアクセント表記を基本資料として、計算機を用いて日本語のアクセントの型の分布をマクロ的に捉えようとする試みである。

この小論で明らかにしたいのは、次のような点である。

- (1) それぞれの拍数の語において、どのような型のアクセントが多いか、あるいは少ないか。それぞれの型の占める割合はどれくらいか。アクセントの型の分布にどのような傾向が認められるか。
- (2) アクセントの型の分布は品詞により、どのような違いがあるか。

2. 資料と手順

ここでは、松村明編著『大辞林』（三省堂、1988）の見出し語と、それに付されたアクセント表記を資料として、現代日本語のアクセントの型を分析する。

『大辞林』には、紙に印刷・製本されたもの（以下「印刷本」とよぶ）のほかに、光ディスクを媒体とした「CD-ROM版」³⁾と「電子ブック版」⁴⁾が販売されている。「CD-ROM版」は直径12センチの光ディスクで、それに付属するパソコン用の専用プログラムによって検索することを前提としている。また「電子ブック版」はそれよりひとまわり小さい直径8センチの小型光ディスクで、「電子ブックプレーヤー」という特別な機械装置で検索・閲覧することを前提として製作されている。しかし、「CD-ROM版」にしても「電子ブック版」にしても、電子化されたデータをテキスト・ファイルとして取り出すことによって、専用の検索プ

プログラムやプレーヤーに頼ることなく、独自の観点で検索を行い、必要なデータを抽出して、研究に利用することができる。

この小論では、電子ブック版の『大辞林』をもとに、そこに採録されている見出し語と、アクセントの型をパソコン上の電子テキストの形で抽出し、分類、計算、および分析を行おうとするものである⁵⁾。

* * *

『電子ブック版 大辞林』の光ディスクに記録されているデータは、テキスト・ファイル形式ではないのでパソコン上で直接読んだり検索したりすることはできない。こうしたデータを、パソコン上で直接利用できるように、第1の作業は『大辞林』の本文をテキスト・ファイルとして取り出すことであった。これには、EB.EXE⁶⁾という電子ブック検索用のプログラムを利用した。

まず、本文の中から「慣用句・ことわざの類」を除くすべての見出し語と説明を抽出した。「慣用句・ことわざの類」というのは、たとえば「あし(足・脚)」という見出し語のもとにまとめられている次のような表現で、アクセントは付されていない。

「一が地に付かない」

「一が付く」

「一が出る」

「一が早い」

「一が棒になる」 etc.

一方、印刷本の『大辞林』では「親項目」に対する「子項目」として表記されている複合語が、「電子ブック版」ではすべて独立の項目として見出し語が立てられている。たとえば、印刷本では「あぶら(油・脂・膏)」という見出し語のもとに、「一あげ(油揚(げ))」「一あし(脂足)」「一あせ(脂汗・油汗)」「一いし(油石)」等々の語がまとめられているが、「電子ブック版」ではそれぞれ「あぶらあげ(油揚(げ))」「あぶらあし(脂足)」「あぶらあせ(脂汗・油汗)」「あぶらいし(油石)」等々独立の見出し語が立てられている。これらにはアクセントが付されている。

『大辞林』の「あ」から「ん」までの本文を取り出したテキスト・ファイルの容量は総計28,180,284バイト、すなわち約28.2メガバイトになった⁷⁾。『大辞林』の「凡例」によれば、収録語は約22万語におよぶという。上の作業で得られたテキスト・ファイルの本文で見出し語を数えると、18万5,269語であった⁸⁾。上述のように、これは「慣用句・ことわざの類」を除いた数字なので、両者の差が「慣用句・ことわざの類」にあたると思われる。

* * *

語のアクセントは、上述のように数字によってその型が示されているが、見出し語のすべてにアクセントが付されているわけではない。「凡例」によれば、「方言、古語、人名・地名・

作品名などのいわゆる固有名詞，仏教その他特殊な専門分野の用語，および付属語」には原則としてアクセントが示されていない。また「2語以上の要素からなる語で1語化の度合いが薄く，それぞれの構成要素のアクセントから類推できると思われる語」にもアクセントは付されていない。

そこで，手順の第2として，本文から，「アクセントの記載のある見出し語」だけを選び分ける作業を行った。これによって得られた見出し語の数は，総計14万756語であった⁹⁾。これが，すなわち本稿における考察の対象となる基礎データにほかならない。表2は，「アクセントの記載のある見出し語」を抽出してまとめたファイルのうち，見出し語に続けて「漢字またはアルファベットによる表記」を【 】の中に，さらに「アクセント」を[]に入れて掲げたものである¹⁰⁾。

表2 『電子ブック版 大辞林』から抽出した見出し語とアクセント（一部）

あ	【唾】	[1]	あいあい	【靄靄】	[0]
あ		[1]	あいあいかご	【相合(い) 駕籠】	[3]
ああ		[0] [1]	あいあいがさ	【相合(い) 傘】	[5]
ああ	【唾唾】	[1]	あいあいしい	【愛愛しい】	[5]
ああ	【嗚呼・噫】	[1]	あいあう	【相会う】	[1]
ああいう		[0]	アイアン	【iron】	[1] [0]
ああら		[1]	あいいく	【愛育】	[0]
あい	【間】	[1] [0]	あいいろ	【藍色】	[0]
あい	【藍】	[1]	あいいん	【合(い) 印】	[0]
あい	【愛】	[1]	あいいん	【愛飲】	[0]
アイ	【eye】	[1]	あいうち	【相打ち・相撃ち・相討ち】	[0]
アイ	【I·i】	[1]	あいうつ	【相打つ・相撃つ】	[1]
アイアール		【IR】 [3]	あいえ	【藍絵】	[0]
アイアールピーエム		【IRBM】 [8]	アイエスディーエヌ	【ISDN】	[7]
あいあい	【相合(い)・相相】	[0]	アイエスビーエヌ	【ISBN】	[7]
アイアイ	【aye-aye】	[1]	あいえつ	【哀咽】	[0]
あいあい	【哀哀】	[0]		
あいあい	【藹藹】	[0]	(全140,756語)		

表2で取り出したデータに品詞情報は含まれていないが，もとのデータを品詞ごとに分類する作業をこれと並行して進めた。ただし，それぞれの品詞ごとに分類したデータに対して行う作業はほとんど共通しているので，品詞ごとの切り分けの作業については後述することとして，それに続く一連の手順をまとめておく。

* * *

手順の第3として行うべき作業は，上で得られた基礎的なデータを拍数ごとに分類することである。見出し語の拍数を計算して，1拍語から始めて2拍語，3拍語，4拍語と，それぞれ別のファイルに書き出す作業である。拍がかな文字1字と一致しないのは，小さいかなが現れる場合に限られるので，小さいかな「あいうえおやゆよアイウエオヤユヨ」を無視して，

文字数を計算すれば見出し語の拍数を得ることができる。

先の14万756語に対してこの作業を行って得られた結果が表3である¹¹⁾。

表3 拍数別にみた『大辞林』の見出し語 (アクセント表記のあるもののみ)

1拍語	391	11拍語	403
2拍語	5,847	12拍語	216
3拍語	27,660	13拍語	85
4拍語	49,661	14拍語	39
5拍語	22,156	15拍語	29
6拍語	17,283	16拍語	11
7拍語	9,169	17拍語	3
8拍語	5,238	18拍語	3
9拍語	1,612	19拍語	5
10拍語	944	20拍語	1

アクセントが示されている見出し語でもっとも拍数が多かったのは、20拍語(1語)であり、以下19拍~1拍まで、すべての拍数の語が存在する。もっとも語数の多いのは、4拍語で5万語弱(49,661語)である。

参考までに、16拍から20拍までの語を表4に掲げておく。すべて名詞である。

表4 アクセント表記のある16拍以上の見出し語 (全部)

16拍語 (11語):	
アルキルベンゼンスルホンさんえん	【-酸塩】 [13]
インダストリアルエンジニアリング	【industrial engineering】 [12]
おうだんしゅっけつれプトスピラしょう	【黄疸出血-症】 [5]-[6]
オリンピックとうききょうぎたいかい	【-冬季競技大会】 [4]-[7]
カセグレンしきはんしゃぼうえんきょう	【-式反射望遠鏡】 [0]-[0]
ぐんぶだいじんげんえきぶかんせい	【軍部大臣現役武官制】 [4]-[0]
しせきめいしょうてんねんきねんぶつ	【史跡名勝天然記念物】 [13]
せいじんティーさいぼうはっけつびょう	【成人T細胞白血病】 [7]-[0]
どういつろうどうどういつちんぎん	【同一労働同一賃金】 [5]-[5]
メガントロブスパラエオヤワニクス	【Meganthropus palaeojavanicus】 [5]-[7]
りゅうこうせいのうせきざいまくえん	【流行性脳脊髄膜炎】 [0]-[8]
17拍語 (3語):	
げんかいこうようていげんのほうそく	【限界効用逓減の法則】 [5]-[0]
こくえいきぎょうろうどうかんけいほう	【国営企業労働関係法】 [5]-[0]
さいこうはっこうがくせいげんせいど	【最高発行額制限制度】 [7]-[5]
18拍語 (3語):	
こくみんせいしんそうどういんうんどう	【国民精神総動員運動】 [5]-[7]
せいぶつかがくてきさんそようきゅうりょう	【生物化学的酸素要求量】 [0]-[6]
ほうしゃせいたんそねんだいそくていほう	【放射性炭素年代測定法】 [6]-[0]

19拍語 (5語):

げんばつせいめんえきふぜんしょうこうぐん	【原発性免疫不全症候群】	[0] - [10]
こうつうじけんそっけつさいばんてつづき	【交通事故即決裁判手続】	[5] - [10]
こうてんせいめんえきふぜんしょうこうぐん	【後天性免疫不全症候群】	[16]
じどうしゃそんがいばいしょうせきにんほけん	【自動車損害賠償責任保険】	[2] - [13]
そうじょうがんどりゅうかてっこうこうしょう	【層状含銅硫化鉄鉱床】	[16]

20拍語 (1語):

りゅうぐうのおとひめのもとゆいのきりはずし	【竜宮の乙姫の元結の切り外し】	[3] - [2] - [3] - [0]
-----------------------	-----------------	-----------------------

* * *

手順の第4として、1拍~20拍のそれぞれの語の中で、どのようなアクセントの型がそれぞれいくつずつあるかを数える作業を行う。その際、アクセントの型の数え方としては、次のような基準を設けた。

- (1) 2語以上の要素からなる語で、アクセントの単位が2つ以上に分かれるものは、あらかじめ計算の対象から除外する。
- (2) ひとつの見出し語に2つ以上のアクセントの型が示されている場合には、それぞれをひとつと数える。
- (3) の実例は、表4の16~20拍の語にも多くみられる。それらは [0] - [0] のように、2つ(以上)のアクセントがハイフンで結ばれて示されている。それらは複合語のなかでも、1語化する度合いが薄く、それぞれの構成要素のアクセントが保たれているものである。ハイフンの前後のアクセントはそれぞれの構成要素のアクセントである。

構成要素の切れ目に「・」を入れて、例を示すと次のようになる。

しよし・ひゃっか	【諸子百家】	[1] - [1]
あい・つとめる	【相勤める】	[1] - [3]
いかん・そくたい	【衣冠束帯】	[1] - [0]
かんこつ・だつたい	【換骨奪胎】	[1] - [0]
じゅうきよ・しんにゅうざい	【住居侵入罪】	[1] - [3]
あづち・ももやまじだい	【安土桃山時代】	[1] - [5]
じゅう・みんけんうんどう	【自由民権運動】	[2] - [5]
じょうだい・とくしゅかなづかい	【上代特殊仮名遣い】	[1] - [6]
ないかく・じょうほうちょうさしつ	【内閣情報調査室】	[1] - [7]
こくさいれんごう・じむそうちょう	【国際連合事務総長】	[5] - [3]
しょくりょうかんり・とくべつかいけい	【食糧管理特別会計】	[5] - [5]
オリンピック・とうきぎょうぎたいかい	【一冬季競技大会】	[4] - [7]

げんかいこうよう・ていげんのほうそく 【限界効用逓減の法則】 [5]-[0]

ほうしゃせいたんそ・ねんだいそくていほう 【放射性炭素年代測定法】 [6]-[0]

じどうしゃ・そんがいばいしょうせきにんほけん

【自動車損害賠償責任保険】 [2]-[13]

りゅうぐうの・おとひめの・もとゆいの・きりはずし

【竜宮の乙姫の元結の切り外し】 [3]-[2]-[3]-[0]

これらは、すべて今回の分析の対象から除外した。

ただし、

つうかぎぞうざい【通貨偽造罪】 [1]-[2] [5]

のような表記の場合、つうか・ぎぞうざい ([1]-[2]) と、つうかぎぞうざい ([5]) の2通りのアクセントがあるので、[1]-[2] の型は無視して、[5] の型のアクセントだけを計算の対象とした。

(2)の基準に該当するのは、たとえば、

あおまめ【青豆】 [0] [2]

のような語である。この場合、あおまめ ([0]) と、あおまめ ([2]) の両方のアクセントを持つものとして、[0] の型と [2] の型の両方に算定した。

* * *

このように、それぞれの拍数の語においてアクセントの型がどのように分布しているかを計算した結果が表5と表6である。表5は語数、表6は同一拍数の語におけるそれぞれのアクセントの型の割合(百分率)である。

表5において、それぞれの拍におけるアクセントの型の合計は、表3でみた数字と合致しないが、それは上述の(1)および(2)の基準により計算の対象から除外したものや1語で2度以上数えたものが含まれるからである。

表5と表6で目を引くのは、第1に特に6拍以上の語について顕著なことがらであるが、アクセントの「滝」が語末から数えて3拍目と4拍目に集中していることである。これと並んで、3拍語と4拍語では、アクセントの「滝」をもたない語([0]の型)の占める割合が大きく、3拍語で約5割、4拍語では約7割に達する。これ以外の拍においても、アクセントの「滝」をもたない語は全体の1割から2割程度の割合を占めている。

次に、4拍以上の語について、語末から数えて3拍目にアクセントの「滝」がある語の割合を(a)に、語末から数えて4拍目にアクセントの「滝」がある語の割合を(b)に、アクセントの「滝」をもたない語の割合を(c)に、さらに3者を合わせたものを(d)にして示す。

表6 それぞれの拍数の語におけるアクセントの型の分布 (百分率)

型→	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
1拍語	20	80																					
2拍語	13	74	13																				
3拍語	47	40	9	4																			
4拍語	68	8	12	10	2																		
5拍語	25	2	10	46	16	1																	
6拍語	20	2	1	29	36	11	1																
7拍語	6	3	1	1	29	54	7	0															
8拍語	10	1	0	0	1	62	21	3	0														
9拍語	15	1	0	0	0	3	35	39	5	2													
10拍語	17	0	0	0	0	1	2	44	32	3	0												
11拍語	9	0	0	0	0	0	0	2	43	40	5	0											
12拍語	9	0	0	0	0	0	0	1	4	55	27	2	0										
13拍語	9	0	0	0	0	1	0	1	0	3	50	31	4	0									
14拍語	6	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	59	28	3	0								
15拍語	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67	27	0	0							
16拍語	20	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	20	40	0	0	0						
17拍語																							
18拍語																							
19拍語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0	0	0	
20拍語																							

(少数点以下を四捨五入しているので、合計は必ずしも百になっていない。以下も同様。)

	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語	10拍語
(a) 語末から3拍目	12	46	36	54	21	39	32
(b) 語末から4拍目	8	10	29	29	62	35	44
(c) 「滝」をもたない	68	25	20	6	10	15	17
(d) 上3者の合計	88	81	85	89	93	89	93
	11拍語	12拍語	13拍語	14拍語	15拍語	16拍語	19拍語
(a) 語末から3拍目	40	27	31	28	27	0	100
(b) 語末から4拍目	43	55	50	59	67	40	0
(c) 「滝」をもたない	9	9	9	6	7	20	0
(d) 上3者の合計	92	91	90	93	100	60	100

上の一覧より、これら3つの型の合計は、いずれの拍数の語においても8割強から9割以上に達していることが分かる(17, 18, 20拍では該当する語が存在しない)。それぞれの拍において、(a) (b) (c) 3つの型の占める割合は一様でないが、5拍以上の語では、(a) と (b) の合計が5割から8割を占めていることが分かる。

3. 品詞別に見たアクセントの型の分布

『大辞林』には、見出し語の品詞が(動)(形)(副)(形動)等の略号で示されているが、名詞には原則として品詞の表示が省略されている¹²⁾。これをもとにして、本文のテキスト・ファイルから、名詞(品詞の記載がないもの)、動詞、形容詞を選び分け、それぞれの品詞ごとにアクセントの型の分布を見ることにする。

見出し語を品詞別に分類してからの作業の手順は、前節に示したように、拍数ごとに単語を分類し、それぞれの拍数の語においてそれぞれのアクセントの型の数と全体に対する割合を計算する。アクセントの型を数える際に設定した基準も、上に述べたものと全く同じである。次に形容詞、動詞、名詞の順に品詞別にアクセントの型の分布のあり方を調査する。

(1) 形容詞のアクセントの型の分布

本文から抽出した形容詞は総計968語であった。表7にその最初の部分を掲げる。

表7 形容詞の一覧(一部)

あいあいしい【愛愛しい】	[5]	あおくさい【青臭い】	[4]
あいくるしい【愛くるしい】	[5]	あおぐろい【青黒い・黝い】	[4]
あいひとしい【相等しい】	[1]-[3]	あおじろい【青白い・蒼白い】	[4]
あいらしい【愛らしい】	[4]	あおっばい【青っばい】	[4]
あえない【敢え無い】	[3] [2]	あかい【赤い・紅い】	[0]
あおい【青い・蒼い】	[2]	あかぐろい【赤黒い】	[4]

あかるい	【明るい】	[0]	[3]	あたじけない	【5】
あきっぱい	【飽きっぱい】	[4]		あたたかい	【暖かい・温かい】 [4]
あくどい	[3]			あたらしい	【新しい】 [4]
あさあさしい	【浅浅しい】	[5]		あだっぱい	【婀娜っぱい】 [4]
あさい	【浅い】	[0]	[2]	あっけない	【呆気ない】 [4]
あさぐろい	【浅黒い】	[4]		あったかい	【暖かい・温かい】 [4]
あさましい	【浅ましい】	[4]		あつい	【厚い・篤い】 [0]
あざとい	[3]			あつい	【熱い】 [2]
あしい	【悪い】	[2]		あつい	【暑い】 [2]
あしちかい	【足近い】	[4]		あつかましい	【厚かましい】 [5]
あじきない	【味気ない】	[4]		
あじけない	【味気ない】	[4]		(全968語)	

これを拍数によって分類すると、次のようになる。

2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語	総計
6	104	216	288	254	90	8	2	968

これらのうち、

あい・ひとしい【相等しい】 [1] - [3]

のような、複合語のそれぞれの構成要素のアクセントを保持しているものは除外し、

あかるい【明るい】 [0] [3]

のように、2つ（以上の）アクセントを持つものはそれぞれのアクセントを持つものとして数え、拍数別に単語のアクセントの型の分布を求めたものが、表8（語数）および表9（百分率）である。

表8 形容詞のアクセントの型の分布（語数）

型 →	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
2拍語	0	6	0								6
3拍語	24	1	94	0							119
4拍語	55	3	2	205	0						265
5拍語	25	2	0	4	283	0					314
6拍語	30	3	0	0	3	253	0				289
7拍語	3	1	0	0	0	2	90	0			96
8拍語	0	0	0	0	0	0	0	8	0		8
9拍語	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2

表9 形容詞のアクセントの型の分布 (百分率)

型→	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
2拍語	0	100	0							
3拍語	20	1	79	0						
4拍語	21	1	1	77	0					
5拍語	8	1	0	1	90	0				
6拍語	10	1	0	0	1	88	0			
7拍語	3	1	0	0	0	2	94	0		
8拍語	0	0	0	0	0	0	0	100	0	
9拍語	0	0	0	0	0	0	0	0	100	0

表8および表9から、形容詞のアクセントの型は極めて偏った分布をしていることが分かる。目立った特徴として、次の2点を指摘することができる。

(a)形容詞は、どのような拍数であっても語末から2つ目の拍にアクセントの「滝」をもつ語が圧倒的に多い。3拍・4拍語では8割近く、その他の拍数の語ではおよそ9割以上がこの型に含まれる。

(b)上の型に当てはまらないもののほとんどは、アクセントの「滝」をもたない型である。アクセントの「滝」をもたない型は3拍語と4拍語に比較的多い。3拍・4拍語において、この型と(a)の型の比率はおよそ1対4である。

(a)と(b)のそれぞれが占める割合と、両者の合計を(c)としてまとめると次のようになる。

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語
(a)語末から2拍目	100	79	77	90	88	94	100	100
(b)「滝」をもたない	0	20	21	8	10	3	0	0
(c)上2者の合計	100	99	98	98	98	97	100	100

(a)と(b)以外の型は、0~3%と、極端に少ない。

* * *

それでは、(a)と(b)以外の型のアクセントをもつのは、どのような形容詞であろうか？表10にそれらをすべて列挙してみた(全21語)。

語の構成としては、「~無い」(9語)、「~遠い」(4語)、「~多い」(3語)が目立った構成要素で、これらを含むものは16語に及ぶ。

表から見て取れるように、1語(4拍語 わけない【訳無い】[1])を除いて、すべて2通りのアクセントを有しており、いずれも語末から数えて2拍目にもアクセントの「滝」をもっている。ということは、形容詞の中で語末から数えて2拍目にアクセントの「滝」をもたないものは「わけない【訳無い】」1語ということになる。

表10 例外的なアクセントをもつ形容詞 (21語)

3 拍語	まちどおい【待(ち)遠い】 [4] [3]
1 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(1語)	みみどおい【耳遠い】 [3] [4]
おおい 【多い】 [1] [2]	
4 拍語	6 拍語
1 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(3語)	1 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(3語)
ぜひない 【是非ない】 [1] [3]	いくひさしい【幾久しい】 [1] [5]
よぎない 【余儀無い】 [1] [3]	こにくらしい【小憎らしい】 [5] [1]
わけない 【訳無い】 [1]	こむつかしい [5] [1]
2 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(2語)	4 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(3語)
あえない 【敢え無い】 [3] [2]	おそれおおい【恐れ多い・畏れ多い】 [4] [5]
ゆえない 【故無い】 [2] [3]	のこりおおい【残り多い】 [4] [5]
	まわりどおい【回り遠い】 [4] [5]
5 拍語	7 拍語
1 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(2語)	1 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(1語)
こぎたない【小汚い】 [4] [1]	ひちむずかしい【ひち難しい】 [6] [1]
だいじない【大事無い】 [4] [1]	5 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(2語)
3 拍目にアクセントの「滝」をもつもの(4語)	おもいがけない【思い掛け無い】 [5] [6]
えんどおい【縁遠い】 [3] [4]	ぞんじがけない【存じ掛け無い】 [6] [5]
しのびない【忍びない】 [4] [3]	

(2) 動詞のアクセントの型の分布

『電子ブック版 大辞林』の見出し語から抽出した動詞は総計6,606語である。表11にその最初の部分を掲げる。括弧内は活用の種類である¹³⁾。

表11 動詞の一覧 (一部)

あいあう	【相会う】	(ワ五 [ハ四])	[1]
あいうつ	【相打つ・相撃つ】	(タ五 [四])	[1]
あいきょうづく	【愛嬌付く】	(カ五 [四])	[5]
あいしる	【相知る】	(ラ五 [四])	[1]
あいす	【愛す】	(サ五)	[1]
あいすむ	【相済む】	(マ五 [四])	[1]
あいする	【愛する】	(サ変)	[3]
あいせつする	【相接する】	(サ変)	[1] - [3]
あいぜんごする	【相前後する】	(サ変)	[1] - [1]
あいたいす	【相対す】	(サ五)	[1] - [1]
あいたいする	【相対する】	(サ変)	[1] - [3]
あいつうずる	【相通ずる】	(サ変)	[1]
あいつぐ	【相次ぐ・相継ぐ】	(ガ五 [四])	[1]
あいつとめる	【相勤める】	(マ下一)	[1] - [3]
あいてどる	【相手取る】	(ラ五 [四])	[4]
あいてらす	【相照らす】	(サ五 [四])	[1]
あいとうずる	【相投ずる】	(サ変)	[1]
あいととう	【相調う】	(ワ五 [ハ四])	[1] - [3]

あいともなう	【相伴う】	(ワ五 [ハ四])	[1]-[3]
あいなかばする	【相半ばする】	(サ変)	[1]-[2]
あいなる	【相成る】	(ラ五 [四])	[1]
あいはてる	【相果てる】	(タ下一)	[1]
あいはんす	【相反す】	(サ五)	[1]-[1]
あいはんする	【相反する】	(サ変)	[1]-[3]
あいみる	【逢い見る・相見る】	(マ上一)	[1]
あいわす	【相和す】	(サ五)	[1]
あいわする	【相和する】	(サ変)	[1]-[2]
あう	【合う】	(ワ五 [ハ四])	[1]
あう	【会う・逢う・遭う】	(ワ五 [ハ四])	[1]
あえぐ	【喘ぐ】	(ガ五 [四])	[2]
あえる	【和える・齧える】	(ア下一)	[2]
あおぎたてる	【扇ぎ立てる・煽ぎ立てる】	(タ下一)	[5] [0]
あおぐ	【仰ぐ】	(ガ五 [四])	[2]
あおぐ	【扇ぐ・煽ぐ】	(ガ五 [四])	[2]
.....			
(全6,606語)			

これらを、拍数に応じて分類すると、2拍から7拍の語に分かれる。(1拍、および8拍以上の動詞は存在しない。) その内訳は、次の通りである。

2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	総計
281	1,227	2,230	2,090	669	109	6,606

これらのうち、

あい・はんする【相反する】(サ変) [1]-[3]

のような、複合語の構成要素それぞれのアクセントを保持しているものは除外し、

あおぎたてる【扇ぎ立てる・煽ぎ立てる】(タ下一) [5] [0]

のように、2つ(以上の)アクセントを持つものはそれぞれのアクセントを持つものとして数えた上で、それぞれの拍数の語におけるアクセントの型の分布を求めると、表12(語数)および表13(百分率)が得られる¹⁴⁾。

表12 動詞のアクセントの型の分布(語数)

型→	0	1	2	3	4	5	6	7	計
2拍語	115	175	12						302
3拍語	406	36	904	4		(1)			1351
4拍語	920	23	23	1929	0	(2)			2897
5拍語	903	10	12	124	1920	0			2969
6拍語	252	12	12	3	13	628	0		920
7拍語	28	0	4	5	2	16	91	0	146

表13 動詞のアクセントの型の分布 (百分率)

型→	0	1	2	3	4	5	6	7
2拍語	38	58	4					
3拍語	30	3	67	0				
4拍語	32	1	1	67	0			
5拍語	30	0	0	4	65	0		
6拍語	27	1	1	0	1	68	0	
7拍語	19	0	3	3	1	11	62	0

ここでは、動詞のアクセントの型が形容詞とよく似た分布をしていることが見て取れる。表13から明らかのように、動詞のアクセントは、いずれの拍数の語においても

(a) 語末から2拍目にアクセントの「滝」をもつもの

(b) アクセントの「滝」をもたないもの

の2種類に大別される。(a)と(b)の占める割合と、その合計を(c)として次に掲げる。

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語
(a) 語末から2拍目	58	67	67	65	68	62
(b) 「滝」をもたない	38	30	32	30	27	19
(c) 上2者の合計	96	97	99	95	95	81

上の表により、2～6拍の動詞では、(a)と(b)だけで全体の9割以上を占めており、7拍語でも8割以上にのぼっていることが分かる。さらに、(a)と(b)の比率は、およそ2対1から3対1となっている。

* * *

(a)と(b)の型に当てはまらないのは、どのような動詞であろうか? つぎに「例外」の実態を見ておくことにする。

まず、2拍語の動詞では、[2]の型に属する動詞が12個(4%)存在する。それらを列挙すれば、次の通りである。

すく【好く】	[1]	[2]	ふく【吹く・噴く】	[1]	[2]
つく【付く】	[1]	[2]	ふく【葺く】	[0]	[1] [2]
つく【就く】	[1]	[2]	ふす【付す・附す】	[1]	[2]
つく【着く】	[1]	[2]	ふす【伏す】	[1]	[2]
つく【吐く】	[1]	[2]	ふす【臥す】	[1]	[2]
つく【搗く・舂く】	[1]	[2]	ふす【俯す】	[1]	[2]

一覧より明らかのように、すべてが[1]の型も有しており、[2]の型は積極的な例外を形成するものではない。

* * *

3拍語の動詞では、[1]の型に属する36語(3%)と[3]の型に属する4語(0%)が例外的な現れとみなしうる。

まず、[3]の型に属する3拍の動詞を列挙すると：¹⁵⁾

いなむ【否む・辞む】	[3]
そねむ【嫉む・妬む・猜む】	[3]
つよむ【強む】	[3]
ひっす【筆す】	[3]

これらのうち、「そねむ」は印刷本で[2]の型として記されており、「つよむ」は印刷本でアクセントが記されていないので、電子ブック版の誤記と思われる。残りのうち、「いなむ」は他のアクセント辞典では[2]の型として記されており¹⁶⁾、「ひっす」は現代的な語ではない。

次に、[1]の型に属する3拍の動詞は次の通りである。

あいす【愛す】	[1]	ちょうず【調ず】	[0] [1]
いなむ【居並む】	[1]	ていす【呈す】	[1]
かいす【介す】	[1]	とうず【討ず】	[1]
かいす【会す】	[1]	とおす【通す】	[1]
かいす【解す】	[1]	とおる【通る】	[1]
かえす【返す・反す】	[1]	はいす【拝す】	[1]
かえす【帰す・還す】	[1]	はいす【配す】	[1]
かえす【孵す】	[1]	はいす【排す】	[1]
かえる【返る・反る】	[1]	はいす【磨す】	[1]
かえる【帰る・還る】	[1]	はいる【入る・這入る】	[1]
かえる【孵る】	[1]	ひょうす【表す】	[1]
がいす【害す】	[1]	ひょうす【評す】	[1]
がいす【概す】	[1]	まいる【参る】	[1]
きょうす【供す】	[1]	もうす【申す】	[1]
せいす【制す】	[1]	ゆうす【幽す】	[1]
たいす【対す】	[1]	ゆうす【揖す】	[1]
ちょうす【諫す】	[1]	ようす【要す】	[1]
ちょうす【寵す】	[0] [1]	りょうる【料る】	[1] [2]

ここで目立つのは、「愛す、介す、害す、供す、制す、対す、…」といった文語的な動詞で、これらは「愛する、介する、害する、供する、制する、対する、…」という語形に取って替わられつつある。上の動詞のうち、このタイプに属さないのは、次のものである。

かえる【返る・反る】	[1]	とおる【通る】	[1]
かえす【返す・反す】	[1]	とおす【通す】	[1]
かえる【帰る・還る】	[1]	はいる【入る・這入る】	[1]
かえす【帰す・還す】	[1]	まいる【参る】	[1]
かえる【孵る】	[1]	もうす【申す】	[1]
かえす【孵す】	[1]		

これらは、3拍語の動詞でアクセントの主要な例外とみなしうるものである。

* * *

4拍語の動詞では、[1]の型の23語(1%)と[2]の型の23語(1%)が例外的な現れである。

[1]の型に属する4拍の動詞は、次の通りである。

あいあう【相会う】 [1]	さておく【扱措く・扱置く】 [1]
あいうつ【相打つ・相撃つ】 [1]	せいだす【精出す】 [1]
あいしる【相知る】 [1]	そよふく【そよ吹く】 [3] [1]
あいすむ【相済む】 [1]	そんする【損する】 [1]
あいつぐ【相次ぐ・相継ぐ】 [1]	たてつく【楯突く】 [1] [0]
あいなる【相成る】 [1]	ついでる [1]
あいみる【逢い見る・相見る】 [1]	つばする【唾する】 [1]
あいわす【相和す】 [1]	みてとる【見て取る】 [1]
あせする【汗する】 [1]	むちうつ【鞭打つ】 [1] [3]
けつかる [1]	もれきく【漏れ聞く・洩れ聞く】 [0] [1]
けみする【関する】 [3] [1]	よくする【善くする・能くする】 [1]
こいする【恋する】 [3] [1]	

これらの大部分は2拍+2拍の複合語で、前の構成要素(「あい(相)〜」「あせ(汗)〜」「こい(恋)〜」「たて(楯)〜」etc.)のアクセントが複合動詞になっても保たれているとみなすことができる。このタイプに属さないものは「けつかる」「けみする」「ついでる」といった動詞に限られる。

次に、4拍の動詞のうち[2]の型に属するものを列挙すれば、以下の通りである。

あだする【寇する・仇する】 [2] [3]	しかえす【仕返す】 [2] [3]
いかえす【射返す】 [2] [0]	しかえる【仕替える】 [3] [2]
いらえる【答える・応える】 [3] [2]	にかえす【煮返す】 [3] [2]
いわえる【結える】 [3] [2]	のりする【糊する】 [2] [3]
おさえる【押(さ)える・抑える】 [3] [2]	ひかえる【控える・扣える】 [3] [2]
おとする【音する】 [2]	みかえす【見返す】 [0] [2]
きとおす【着通す】 [3] [2]	めしいる【盲いる】 [2]
けかえす【蹴返す】 [0] [2]	ものいう【物言う】 [2]
こたえる【答える】 [3] [2]	ものする【物する】 [3] [2]
こたえる【応える・報える】 [3] [2]	ゆみひく【弓引く】 [2]
ことかく【事欠く】 [3] [2]	ゆめみる【夢見る】 [3] [2]
さおさす【棹さす】 [2] [3]	

ここでは、「音する」「盲いる」「物言う」「弓引く」の4つを除いて、すべて[3]または[0]の型のアクセントも有している。これら4つの動詞も現代語で一般的に用いられるものとは言いがたい。

* * *

5拍語の動詞では、[1]の型の10語(0%)、[2]の型の12語(0%)、[3]の型の124語(4%)が例外的な存在である。

その内、[1]の型をもつのは次のものである(10語)。

あいてらす【相照らす】	[1]
あいはてる【相果てる】	[1]
いみきらう【忌(み)嫌う】	[1] [0]
うってでる【打って出る】	[1]
こいしたう【恋(い)慕う】	[4] [1]
こいねがう【乞い願う・希う・冀う・庶幾う】	[1] [4]
こきつかう【扱き使う】	[1] [4]
たむろする【屯する】	[0] [1]
なみだする【涙する】	[1]
まくらす【枕する】	[1]

これらのうち、半数は[0]または[4]の型も有しているが、残りの半数は2拍+3拍、もしくは3拍+2拍(する)からなる複合語で、この場合、前の要素(相、打って、涙、枕)のアクセントが保持されている。

次に、[2]の型をもつのは次の通りである(12語)。

うばいとる【奪い取る】	[4] [2]	つつきだす【突き出す】	[0] [4] [2]
おそれいる【恐れ入る】	[2]	まかりこす【罷り越す】	[2]
こころする【心する】	[2]	まかりでる【罷り出る】	[2] [4]
たけりたつ【猛り立つ】	[4] [2]	ものもうす【物申す】	[3] [2]
たたききる【叩き切る】	[4] [2]	よわいする【齒する】	[2]
たたきわる【叩き割る】	[4] [2] [0]	わかりきる【分かり切る】	[0] [4] [2]

これらのうちの7語は、[0]または[4]の型もっている。残りのうち、現代でよく使われるのは「おそれいる」と「こころする」の2語で、「まかりこす」「ものもうす」「よわいする」は古風な動詞である。

さて、5拍の動詞のうち、[3]の型をもつのは124語ある。ここでは、それらを列挙することはしないが、その中で目立つのは、次のような語形をもつものである。

～かえる(34語)、～がえる(10語)、～かえす(37語)、～がえす(3語)、
～とおる(4語)、～とおす(12語)

これらの語形をもつものの合計は100語で、全体の約8割にあたる。

[3]の型をもつ5拍の動詞124語のほとんどは[0]または[4]の型も有しており、[3]の型しかもたないものは次の一覧に示す40語である。

これらのうち、「～かえす、～がえす(17語)」「～かえる、～がえる(9語)」「～とおす(7語)」「～とおる、～どおる(5語)」といった構造をもつ語が合計39語、残りは「さとなれる」1語である。3拍語で[1]の型をもつ「かえる、かえす、とおる、とおす」といった

いいかえす【言(い)返す】 [3]	つきかえす【突(き)返す】 [3]
いいとおす【言(い)通す】 [3]	つきとおす【突(き)通す】 [3]
いきどおる【憤る】 [3]	つきとおす【吐き通す】 [3]
いてかえる【凍て返る・互て返る】 [3]	つきとおる【突(き)通る】 [3]
うらがえす【裏返す】 [3]	つかかえす【突っ返す】 [3]
うらがえる【裏返る】 [3]	とびかえる【飛(び)返る】 [3]
おいかえす【追(い)返す】 [3]	にえかえる【煮え返る】 [3]
おしかえす【押(し)返す】 [3]	ぬれとおる【濡れ透る】 [3]
おしとおす【押(し)通す】 [3]	ひきかえす【引(き)返す】 [3]
ききかえす【聞(き)返す】 [3]	ひっかえす【引っ返す】 [3]
ききとおす【聞(き)通す】 [3]	ひるがえす【翻す】 [3]
くつがえる【覆る】 [3]	ひるがえる【翻る】 [3]
さとなれる【里馴れる】 [3]	ふみかえす【踏(み)返す】 [3]
しいつける【強い付ける】 [3]	まきかえす【巻(き)返す】 [3]
しみとおる【染(み)透る・沁み透る】 [3]	やりとおす【遣り通す】 [3]
すきかえす【漉き返す】 [3]	ゆりかえす【揺り返す】 [3]
すきかえす【鋤き返す】 [3]	よびかえす【呼(び)返す】 [3]
すきとおす【透(き)通す】 [3]	わかかえる【若返る】 [3]
すきとおる【透(き)通る・透き徹る】 [3]	わきかえる【沸き返る】 [3]
そめかえす【染(め)返す】 [3]	われかえる【割れ返る】 [3]

語が複合語の後の要素としてこの型のアクセントに影響していることが分かる。

6拍以上の動詞の例外的なアクセントの型の検討は、紙数の関係で省略するが、そこにおいても「～かえす、～がえす、～かえる、～がえる、～とおす、～とおる、～どおる」という構造をもつ動詞が目立った存在であることを指摘しておきたい。たとえば、6拍の動詞で [4] の型をもつ13語のうちの10語、また7拍の動詞で [5] の型をもつ16語のうちの12語は、このタイプに属している。

(3) 名詞のアクセントの型の分布

『電子ブック版 大辞林』から抽出した、アクセントの表記のある名詞は総計12万8,994語であった。得られたファイルの最初の部分を表14に掲げる。

これらを拍数によって分類すると次の通りである。

1拍語	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語	10拍語
371	5303	25535	45047	19387	15952	8883	5174	1604	942
11拍語	12拍語	13拍語	14拍語	15拍語	16拍語	17拍語	18拍語	19拍語	20拍語
404	215	86	39	29	11	3	3	5	1

これらのうち、

あきの・ななくさ【秋の七草】 [1]-[2]

のような、複合語の構成要素がそれぞれのアクセントを保持しているものは計算の対象から

表14 名詞の一覧 (一部)

あ	【唾】	[1]	あいえ	【藍絵】	[0]
あい	【間】	[1] [0]	アイエスディーエヌ	【ISDN】	[7]
あい	【藍】	[1]	アイエスピーエヌ	【ISBN】	[7]
あい	【愛】	[1]	あいえつ	【哀咽】	[0] (名スル)
アイ	【eye】	[1]	アイエヌエス	【INS】	[5]
アイ	【I·i】	[1]	アイエヌエフ	【INF】	[5]
アイアール	【IR】	[3]	アイエルエス	【ILS】	[5]
アイアールビーエム	【IRBM】	[8]	あいえん	【合〈い〉縁・相縁】	[0]
あいあい	【相合〈い〉・相相】	[0]	あいえん	【哀婉】	[0] (名・形動)
アイアイ	【aye-aye】	[1]	あいえんか	【愛煙家】	[0]
あいあいかご	【相合〈い〉駕籠】	[3]	あいえんきえん	【合〈い〉縁奇縁・相縁機縁】	[5]
あいあいがさ	【相合〈い〉傘】	[5]	あいおい	【相生】	[0]
アイアン	【iron】	[1] [0]	あいおいぎし	【相生挿〈し〉】	[0]
あいいく	【愛育】	[0] (名スル)	あいおいのまつ	【相生の松】	[6]
あいいろ	【藍色】	[0]	あいおいぼん	【相生盆】	[3]
あいいん	【合〈い〉印】	[0]	あいおいむすび	【相生結び】	[5]
あいいん	【愛飲】	[0] (名スル)		
あいうち	【相打ち・相撃ち・相打ち】	[0]	(全128,994語)		

除外し、

あさいち【朝市】 [2] [3]

のように、2つ(以上の)アクセントを持つものは両方のアクセントを持つものとして数えて、それぞれの拍数の語におけるアクセントの型の分布を求めると、表15(語数)および表16(百分率)のようになる。

表15および表16は、表5および表6で見た全品詞のアクセントの型の分布と極めて類似している。アクセントの表記のある語の全体140,756語のうち、名詞の占める割合は128,994語、すなわち91.6%にのぼっており、品詞全体のアクセントの型の分布は、名詞におけるアクセントの型の分布がそのまま反映されていたことが見て取れる。

3拍~7拍の語において、語末から数えて2拍目にアクセントの「滝」があるものが、全品詞の場合に比して2~8%少なくなっているのは、この型の大部分を占めていた動詞と形容詞が除外されたためと考えられる。

上の表からただちに見て取れる事柄としては、次のような点が指摘できるであろう。

- 1拍語では、[1]型が多い([0]型の約4倍)。
- 2拍語も、[1]型が多い([0]型と[2]型の5~6倍)
- 3拍語では、[0]型(全体の5割弱)と[1]型(4割強)が多い。
- 4拍語では、圧倒的に[0]型が多い(全体の7割強)。
- 5拍語以上の名詞では語末から数えて3拍目と4拍目にアクセントの「滝」をもつものが多い。これらと、アクセントの「滝」をもたない型とを合わせると、全体の9割前後を占め

る。これを、具体的な数字でみることにする。次の表は、5拍以上の拍数の語において、次のような型の占める割合を示したものである。

- (a) 語末から3拍目にアクセントの「滝」をもつもの
- (b) 語末から4拍目にアクセントの「滝」をもつもの
- (c) アクセントの「滝」をもたないもの
- (d) 上の(a)~(c)の合計

(参照のため4拍語も掲げる。)

	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語	10拍語
(a) 語末から3拍目	12	53	39	55	21	39	32
(b) 語末から4拍目	7	11	32	30	63	35	44
(c) 「滝」をもたない	72	24	18	6	10	15	17
(d) 上3者の合計	91	88	89	91	94	89	93

	11拍語	12拍語	13拍語	14拍語	15拍語	16拍語	19拍語
(a) 語末から3拍目	40	27	30	26	19	0	0
(b) 語末から4拍目	43	55	51	59	71	40	100
(c) 「滝」をもたない	9	9	8	6	5	20	0
(d) 上3者の合計	92	91	89	91	95	60	100

* * *

ところで、アクセントの「滝」が語末から3拍目と4拍目という2つの拍に分かれて存在するというのは、どのような理由によるのであろうか？それを明らかにするために、次のような観点を取り入れて分析を進めてみたい。それは、アクセントの「滝」は、「撥音（はねる音「ン」）」「促音（つまる音「ッ」）」「長音（のばす音「ー」）」といったいわゆる「特殊拍」に現れることが極めて稀だという事実である。

たとえば、学問領域を表す「政治学、歴史学、考古学、心理学、教育学、動物学、民族学、言語学」等々「～学（ガク）」のつく名詞は、一般に「学」の前につく名詞の最後の拍にアクセントの「滝」をもっているが、最後の拍に撥音、長音、および二重母音相当の拍がある場合、アクセントの「滝」はそれらを守る形でそのひとつ前の拍に現れる。（「滝」を「」で表す。）

A) 規則的な例（「ガク」の直前の拍にアクセントの「滝」がある）：

セー^レジ^レガク（政治学）、レキ^シジ^レガク（歴史学）、ユー^コジ^レガク（考古学）、
シン^リジ^レガク（心理学）、キョー^イク^レガク（教育学）、ドー^ブツ^レガク（動物学）、
ミン^ゾク^レガク（民族学）、ゲン^ゴジ^レガク（言語学）、etc.

B) アクセントの「滝」がひとつ前の拍にずれる例：

1) 「ガク」の前に撥音がある場合：

ブン^ゲン^レガク（文献学）、ジ^シン^レガク（地震学）、サイ^キン^レガク（細菌学）etc.

2) 「ガク」の前に長音がある場合¹⁷⁾ :

オン^ーセ^ーガク (音声学), トー^ーゲ^ーガク (統計学), シュー^ーキョ^ーガク (宗教学),
 オン^ーキョ^ーガク (音響学), etc.

3) 「ガク」の前に二重母音相当の拍がある場合 :

ケー^ーザ^ーイガク (経済学), シャ^ーカ^ーイガク (社会学), etc.

上の例は、いわゆる「複合名詞」においてアクセントの型が形成される典型的なパターンのひとつであるが、アクセントの「滝」が語末から3拍目と4拍目にきていることは名詞全体のアクセントの「滝」の分布に重なるものとして示唆的である。つまり、さきに見た語末から3拍目と4拍目にアクセントの「滝」をもつものには、これと同様の条件にあるものが少なからず含まれていると考えられる。

問題は、それを具体的に数字の上で確認できるかどうか、確認できるとすればそれがどの程度の割合を占めているかということである。そこで、語末から4拍目にアクセントの「滝」がある語であって、同時に語末から3拍目に「撥音」「促音」「長音」「二重母音相当」をもつものがどれくらい含まれているかを調査してみる。手順としては、語末から4拍目にアクセントの「滝」がある語の中から、次の条件に合うものを抽出する作業を行うことになる。長音に関しては、カタカナ表記の外来語では長音符号で表記することが多いが、それ以外の和語・漢語では長音符号を用いないので、これを別々に分けて処理することにする。

(ア) 語末から3拍目に次のような拍があるもの

撥音 (ん, ン)。

促音 (っ, ッ)。

長音符号で表記される長音 (ー)。

(イ) 語末から4拍目と3拍目が、次のような連続をもつ長音¹⁸⁾。

「お」段の拍 (おこごそぞとどの etc.) と「お」の連続。

「お」段の拍 (おこごそぞとどの etc.) と「う」の連続。

「う」段の拍 (うくぐすずつつぬ etc.) と「う」の連続。

「え」段の拍 (えげげせぜてでね etc.) と「い」の連続。

(ウ) 語末から4拍目と3拍目が、次のような連続をもつ二重母音相当拍¹⁹⁾。

「あ」段の拍 (あかがさざただな etc.) と「い」の連続。

「ア」段の拍 (アカガサザタダナ etc.) と「イ」の連続。

次の表は、4拍以上の拍数の語において、

(f) 語末から4拍目にアクセントの「滝」がある語の数

そのうち

(g) 上の (ア) ~ (ウ) の条件のいずれかに当てはまる語の数、

(h) は、(f) における (g) の占める割合 (百分率)

を示したものである²⁰⁾。

	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語	10拍語
(f)	3718	2358	5478	2778	3348	586	424
(g)	2775	1817	4404	2214	2744	462	330
(h)	75	77	80	80	82	79	78
	11拍語	12拍語	13拍語	14拍語	15拍語	16拍語	19拍語
(f)	172	111	38	20	15	2	2
(g)	124	89	23	14	9	2	1
(h)	72	80	61	70	60	100	50

これをみると、大部分の拍数の語において、語末から4拍目にアクセントの「滝」がある語の中で上の(ア)～(ウ)の条件に当てはまるものは全体の7割から8割を占めていることが分かる。これらはすなわち、語末から3拍目にアクセントの「滝」をもつ型の変種として捉えることができるものである。

そこで、上の(g)を、語末から3拍目にアクセントの「滝」をもつ語と合わせて、それぞれの拍数の語に占める割合を求めてみると、次のようになる。

(i)は、語末から3拍目にアクセントの「滝」をもつものが全体に占める割合、

(j)は、語末から4拍目にアクセントの「滝」がある語の中で、上記(ア)～(ウ)の条件に当てはまるものが全体に占める割合、

(k)は、上の(i)と(j)の合計である。

	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語	9拍語	10拍語
(i)	12	52	39	55	21	38	32
(j)	6	9	26	24	51	28	34
(k)	18	61	65	79	72	66	66
	11拍語	12拍語	13拍語	14拍語	15拍語	16拍語	19拍語
(i)	40	27	30	26	19	0	0
(j)	31	44	31	41	43	40	50
(k)	71	71	61	67	62	40	50

上の数字から、5拍以上15拍までの名詞では(k)に該当するものが全体の6割から7割台に達していることが分かる。換言すれば、5拍以上の名詞でアクセントの「滝」をもつ場合、原則として語の終わりから3拍目にアクセントの「滝」をもち、そこに「撥音」「促音」「長音」「二重母音相当」といった拍がある場合は、アクセントの「滝」がひとつ前の拍にずれるとみなすことができる。

名詞における「例外的な」アクセントの型については、稿を改めて検討することとしたい。

注

- 1) これらは伝統的に拗音と呼ばれている。現代では、小さい「ャ」「ユ」「ョ」のほか、主に外来語の表記で「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」「トウ」のように、小さい「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」を伴った表記法も珍しくない。これらも2文字が1拍に相当する点は同じである。
- 2) 松村明編『大辞林』三省堂、1988. 凡例一八、
- 3) 『大辞林 CD-ROM版』発行：三省堂、発売元：日本電気ホームエレクトロニクス（株）、1993.
- 4) 『電子ブック版 大辞林』三省堂、1992.
- 5) 「電子ブック版」と「CD-ROM版」とは、本文に関して違いは認められない。「電子ブック版」で、「印刷本」とは違ういくつかの誤記を見だして、「CD-ROM版」にあたったがすべて「電子ブック版と同じであった。
- 6) 志村拓氏の作製によるMS-DOS用のフリー・ソフトウェア。
- 7) 『電子ブック版 大辞林』の光ディスクには総計187,510,784バイト、すなわち187.5メガバイト強のデータが記録されているが、その大半は検索のための索引である。ちなみに、「CD-ROM版」のデータは総計340,335,284バイト（340メガバイト強）である。
- 8) テキスト・ファイルにした大辞林の本文は、一定の構造（書式）を備えている。見出し語は必ず行の最初から始まるが、見出し語以外で行の最初から始まるのは〔二〕〔三〕〔四〕、〔2〕〔3〕〔4〕、〔2〕〔3〕〔4〕...のような「語義区分」の括弧つき数字、参照を示す「→」「⇒」「{」等の記号に限られている。したがって、「ひらがな、もしくはカタカナで始まる行」の数を数えて見出し語の数を得た。
- 9) アクセントは〔0〕〔1〕〔2〕〔3〕...のように全角のカギ括弧に半角のアラビア数字で表記されているので、こうした文字列を含む行を検索、抽出してその行数を数えた。
- 10) 元のテキスト（印刷本、電子ブック版とも）では、「漢字表記」は黒い括弧（〔 〕）に、「アルファベット表記」は白抜きの括弧（〔 〕）に入っているが、すべて黒い括弧に変換した。
- 11) 『電子ブック版 大辞林』のデータをそのまま処理した数字である。作業を進めていくうちに、電子ブック版の明らかな誤記や、印刷本との異同が見い出されることがあったが、ここでは校訂を行うことよりも全体としての傾向をつかむことにとめた。以下、特に断らない限りは、元のデータをそのまま用いている。
印刷本と電子ブック本の異同として見出し語のアクセントについては、次の2つが目にとまった。

こうりょうしょう【香料諸島】〔3〕……

この語は、印刷本に見出しそのものが存在しない。

しんうすゆきものがたり【新薄雪物語】〔1〕……

印刷本では、この語にアクセントは示されていない。いずれの場合も、正しいアクセントを示したのではなく、誤記と思われる。

- 12) したがって、品詞の表記のないものが名詞である。ただし、ある見出し語が2つ以上の品詞で使われ、そのうちのひとつが名詞である場合には（名）と示されている。
- 13) 動詞中には、同じ見出し語に2つ以上の活用の種類が示されているものがあるが、表では最初に挙げられているものを記した。

- 14) 表12で3拍語と4拍語で [5] の型をもつものが見いだされたが、これは『電子ブック版 大辞林』の誤記である。具体的には、
- 3拍語 ねかす 【寝かす】 [5]
 4拍語 こうじる 【困じる】 [0] [5]
 こうずる 【蕩ずる】 [0] [5]
- が、これである。印刷本に従えば3拍語(ねかす)の [5] は [0] の誤り、4拍語(こうじる、こうずる)の [5] は [3] の誤りである。以下の計算では、これらを訂正して扱った。
- 15) 3拍の動詞では引用の「〜と」に続く場合、「〜と」の前の拍にアクセントの「滝」があるものを [3] の型としている。
- 16) NHK 編『日本語発音アクセント辞典』改訂新版、日本放送出版協会、1985。
 秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』第二版、三省堂、1981。
- 17) オンゼーガク、トーゲーガクの場合、オンゼイガク、トーゲイガクという発音も行なわれ、その場合「二重母音相当の拍」として扱われるが、いずれにしてもアクセントの位置(型)は同じである。
- 18) (イ) では、カタカナで表記される外来語は対象としていない。
 また、それぞれの「段」の拍を具体的に示すと：
 「お」段=おごぞそとどのほぼぼもよるきよぎよしよじよちよぢよによひよびよびよ
 みよりよ
 「う」段=うくぐすずつづぬふぶむゆるきゆぎゆしゆじゆちゆぢゆにゆひゆびゆびゆ
 みゆりゆ
 「え」段=えけげせぜてでねへべべめれ
 「あ」段=あかがさざただなはばばまやらわきやぎやしやしやぢやぢやぢやにやひやびやびや
 みやりや
 「ア」段=アカガサザタダナハバパマヤラワキヤギヤシヤジャチャヂャニヤヒャビャピャ
 ミヤリャファツァクァグァヴァ
- である。「え」段の拍と「い」の連続は、多くの場合二重母音相当ともみなしうる。これ以外の「あ」段+「あ」、「い」段+「い」、「え」段+「え」の連続は、今回の調査には含めなかった。
- 19) 二重母音相当拍は、今回の調査では「あい」だけに限り、「うい」「おい」は含めなかった。
- 20) (イ) の条件にあてはまるもので、語末から4拍目と3拍目に意味の切れ目がある場合を捜したが、次の1語が見い出されただけであった。
 ひとおもい【一思い】 [2] [3]
 このような場合、「と+お」の連続を長母音として扱うことはせず、計算から除外した。